

## 月の花挽歌 ～13. リスク・マネージメント～

### 13. リスク・マネージメント

#### 13- 1

麻里子の運転するシビックハイブリッドは上田盆地の千曲川左岸にある河岸段丘の塩田平の田園風景の中を走行していた。

信州の鎌倉の通り名を持つ塩田平は、鎌倉時代に北条氏に統治され、東信濃の政治文化の中心だった。今でも国宝や重要文化財などの歴史的建造物が多数残されている。

初秋の薄曇りの昼時であったが、昨夜の踊りの高揚感の名残りが真紀の心身に留まっていた。

長野新幹線の上田駅まで送ってくれると麻里子が言ってくれたので、真紀は甘えることにした。

「忙しいところを悪いですね」

「月曜日は団体客の予約もないので、気になさらないでください。失礼ですが、着てらっしゃるのは上田紬でしょ。よろしかったら、紬工房もご案内いたします」

助手席にいる真紀は何かを見透かされているようで、ハンドルを握っている女杜氏の横顔を盗み見した。

「フランス帰りのオーナーシェフがやっているレストランでランチもご一緒させてください」と麻里子は言って微笑み返してきた。

麻里子の屈託のない笑顔を見ていると、一寸先は闇と言うたとえがあるが、藪から棒に酒造会社の深刻な経営状態の話など切り出される展開になろうとは思ってもよらなかった。

真紀との邂逅は、目に見えない兄の力が働いたからだと独り決めした麻里子は、馬が合ったことも手伝って、このままやり過ごしては、後になってきっと後悔すると思い、しばらく続いた当たり障りのない会話が途切れて塩田平に入ったところで、「真紀さん、いきなり内輪のことを打ち明けて気を悪くしないでくださいね」と前置きをしてから、「昨日お会いしたばかりなのに……。でも、不躰であることは承知で言っちゃいます。うちの会社は、ああ見えても実は、火の車なんです」

「———」

「そうですよね！赤の他人にお話しする事ではありませんよね。私、どうかしているは」

「赤の他人なんかじゃありませんよ！お話し続けてください」

数分の沈黙があってから、麻里子は白くて可憐な秋ソバの花が咲き広がる畑の傍らに、プレミアムホワイトの車体を停車させた。